

# かな文字「つ・ツ」の起源

——「門」から「つ・ツ」へ——

紅林幸子

## 1 はじめに

長く仮名書道の書作に携わってきた。並行して、解明のつかないかな文字の字源を研究課題とし、「訓点語学会」「書学書道史学会」等で発表してきた。『訓点語と訓点資料』第110輯に掲載していただいた、「書体の変遷」<sup>(1)</sup>「氏」から「弓」へ<sup>(2)</sup>を皮切りに、「無・无」「爾・尔・尔」の文字関係を、書体と書法を視点に論述してきた。何れも、仮名書道との関わりの中で見出した課題である。

今回考察を試みるのは、「つ・ツ」の字源である。古来「つ」の字源を、「川・州・津」などとしながらも多くの疑問を呈し、いまだ明確な結論を得ていない。「川」あるいは「州」と考えるのは、行・草書体の字形が「つ・ツ」に類似しているからである。しかし、「六書」の運用法の一つ、「仮借」で成立している仮名の機能を考える時、音韻がまったく異なる「川」は容易に認めがたい。「津」は「訓仮名」として機能するが、それは後のことである。「州」は音韻としては考えられないわけではないが、字形に無理がある。

私が最も着目するのは、「門」である。「門」と「門」は、文字成立草創期、全く異なる字形、音義であった。しかし、手書きによることで

文字の草体化が進み、字姿が次第に近似していった。さらに後の「鬪」に代表されるように、「門」にその音義を意味する旁を追加することにより、「門」構え単独の使用頻度は低くなつたと推測する。逆に、様々な旁が加わる「門」は使用頻度も高く、草体化が進むことで、門構えの部分は限りなく「つ」の字形に近づいていった。

二〇〇六年第九五回「訓点語学会」において「書体の変遷Ⅳ―門・門・つ―」という題目で口頭発表をした。<sup>(3)</sup>

本稿では、当該文字の書体、書法の変遷に加え、大陸における古音の音韻と、仮名文字成立時期における我が国上代の音韻を比較する。字形のみならず音韻の考察により、長らく疑問視されてきたかな文字「つ・ツ」の起源を明らかにすることが本稿の目的である。

## 先行研究 研究方法

江戸時代、新井白石著『同文通考』（新井白蛾補・一七六〇刊）、卷三「伊呂波釋文」の「つ」の項に「肥人書ノ川ノ字。草書ヲ以ッテウツセル也」と記し、別項に「肥人」は「コマビト」とあり、「高麗國ノ書」に見える字であるとしている。片仮名においても同字源が記される。<sup>(4)</sup>  
岡田真澄著『仮字考』（一八二二）において、「つ」の字源に関する考察のなか、『同文通考』の説を批判し、「川、門、説ハ頗ル根拠薄シ」としている。<sup>(5)</sup>

伴信友著『仮名本末』（一八五〇）において、「ツ」は「川之変体」とし、「つ」は「片假字ツ之草変」と記述している。

また、近代国語学の基礎を築いたチェンバレン (Basil Hall Chamberlain 1850-1935)、著書『文字のしるべ』で「ツ・つ」の字源を「門」としながらも、その由来をはかりかね、「門」か「門」か、疑いの余地があると書き加え、「門」の字形として手本に示されたNo.685の文字は「鬪」である。

現代においても、「ツ・つ」の字源を、草体化した字形から考察して、「川・州・津」などとする研究者も、「未詳」と追記することが多い。こうした現状から、小松英雄氏『日本語書記史原論』（一九九八）において、次のように記述している。<sup>(6)</sup>

仮名の字源に関する本格的な研究は伴信友『仮名本末』（一八五〇）に始まり、訓読テキストの研究が盛んになってから、一段と精細になってきているが、仮名「つ」の字源はいまだ特定されていない。古い中国字音が日本語の「ツ」の音節に結び付きそうな感じを選び出し、その草体が「つ」の字体になると説明しても、引き当てに無理があるからである。

…中略…仮名「つ」の字源が確定できないことは、日本語書記史にとって重要な意味を持っている。…  
仮名「つ・ツ」の字源解明は、国語史において最も重要な課題の一つであり、本稿の意義は、そこにある。

研究方法としては、まず大陸、日本、それぞれ古辞書の記述を確認する。次に、残されている文字資料の筆跡から、書体の変遷をたどるところで字形変化を推察する。さらに最も問題視される「音韻」の面からも考察を深めることで、仮名文字「つ・ツ」の起源解明へと繋げたい。

## 2 大陸における「門」・「門」

### 字書の「門」「門」

#### 『説文解字』

先ずは部首引き辞書の嚆矢として、紀元後百年頃に成立した『説文解字』の「門」の項目を示す。



両士相對兵杖在後象門之形

凡門之屬皆從門

都豆切

三篇下表六一三

『説文眞本』汲古閣藏版北宋本校刊<sup>(7)</sup>

白川静氏『字通』(一九九七)の解釈によれば、

〔説文〕三下に「両士相ひ對<sup>かむ</sup>ひ、兵杖後に在り。門<sup>か</sup>たふの形に象る」とするが、卜文の字形は兵杖をもたず、二人が髪をふり乱して格

闘する形である。のち声符を加えて闘(闘)となるが、その正字は斲<sup>た</sup>くに従い、斲は盾と斤、すなわち干戈<sup>かん</sup>を示す形。嚴密にいえば

門は手格、闘は干戈を執つて戦うことをいう。

「門」は、『説文解字』において示された五四〇部首の一つとして記載される。「門」を部首とする十種の標出文字(新附の「闔」を含む)が並び、いずれもみな戦い争うさまを意味する。

#### 『大広益会玉篇』

『玉篇』は、五四三年、中国南北朝時代の南朝梁の顧野王によって編纂された部首別漢字字典で、字書としては『説文解字』の次に古く、

部首は『説文解字』とほぼ等しい五四二部に分類している。全体が残るのは北宋に成立した『大広益会玉篇』（一〇一三年）であり、それ以前のテキストは部分的にしか残っていない。原本玉篇は中国では滅んでしまい、日本にいくつか残巻がある。空海が編纂したといわれる『篆隸万象名義』は、篆書部分を除いて親字の配列が原本玉篇残巻と一致し、説明も玉篇から抜き出したもので、これによって原本玉篇の全体像をある程度知ることができる。「門」は『説文解字』と同じく独立した部首であり、十二字が掲載される。「鬪」は正字、門構えの「鬪」は俗字として認識されている。「関」に関して、音注は異なるが義注に門構えに正字の旁「斲」を記し、「たたかい争う意味」としている。

『大広益会玉篇』

門部第七十三

凡十

門

都豆切説文云両士相對兵仗在後象門之形今作門同

鬪

當候切争也

鬪

上同

関

胡辯切鬪争也

鬪

鬪

鬪

鬪

鬪

鬪

鬪

鬪

## 『干禄字書』

『干禄字書』は、唐代七世紀から八世紀にかけての学者、顔元孫が著した字書で、漢字の楷書の字体を整理し、標準字形を示した。科挙の答案に用いるのにふさわしい字形について、標準を示すことで、採点基準が明確化されることを期待し、正字の規範意識を広めることが目的であった。約八〇〇字の漢字は、異体字を整理して、「正字」「通字」「俗字」の三種に分類している。筆者の顔元孫の定義によれば、「正字」として分類されている字体こそが、確実な根拠を持つ由緒正しい字形であり、「通字」は正字に準ずるものとして扱われ、長年習慣的に通用してきた字形である。「俗字」は、民間で使用されてきた字形で、公的な文書で用いるべきではないとした。

『干禄字書』

鬪鬪鬪

上俗中  
通下正

去声の部四十三ウ2く3

（文化十四年本）官板出雲寺本

音は記されないが、唐代における当該字の字形認識は、「鬪」が正字、「鬪」が通字、「鬪」が俗字となる。

ここでは、すべて門構えで記される。正通俗の別は構えの中、主に「斤・寸・斗」の別である。「斤・斗」は、「おの」「たたかう」といずれも戦いに関連する。この正字意識が次代の字書に様々な影響を与える。先の『大広益会玉篇』において、この部分が原本玉篇を正しく反映しているとすれば、俗字の「鬪」は、正字に準ずる通字とみなされたことになる。「寸」は、指の幅を意味し、本来「斗」と同程度量衡の単位である。しかし、「寸」の項に記述された、白川静氏『字通』の解釈によれば、

【部首】〔説文〕に寺・將（將）…の六字を属し、〔玉篇〕に射・尉など三字を加える。字の初形からいえば、みな又に従う字で、寸尺の寸の意をもつものはない。字書の寸部の字も同じ。…。

【声系】〔説文〕に刊を寸声とし、「切る」と訓する。…。

さらに白川静氏『字統』（一九九七）において、『干祿字書』で通字とされた字形「鬪」を掲出字として、その下に〔鬪〕〔鬪〕を付記し、「門」と「鬪」の文字関係を示し、その構造法を次のように記している。

**形声** 正字は鬪に作り、𠂔声。𠂔は左手に盾を執り、右に斤を執って戦う形。門は手格の形で、この両方は声義近く、合せて一字となつたが、字の構造法からいえば、𠂔の声義に従う文字である。

『龍龕手鏡』

『龍龕手鏡』は、遼代、幽州の僧行均によって編纂され、統和五年（九九七）に成立した字書で、四卷からなる。『龍龕手鏡』は宋代、翼祖の諱と同音である「鏡」を避けて「鑑」に改められたが、他に見ない異体字も掲載されていることから、併載する。

『龍龕手鏡』 𠂔 正

𠂔 今都豆反一 競也又姓四

𠂔 都 豆

（高麗本）（中華書局出版） 九四頁

『龍龕手鏡』 鬪 正都豆切競也又姓

鬪 穩也

鬪 今

鬪 呼也又音十人姓 今 増

鬪 同 今 増

卷第二 門部第八 去声の部 二十四ウ7

『龍龕手鏡』における当該字の正字は、「鬪」であるが、「門」部に記載される。同字とみなされる二字は、いずれも門構えであり、「𠂔」と「鬪」の違いだけである。これを踏襲している『龍龕手鏡』においても、「門」部に記されたが、五文字の構えは、「門」である。字形に関しては、『龍龕手鏡』で軌道を基に戻したといえるが、所属は同様に「門」部であり、「門」は独立した部首として扱われていない。

字書の中でも混乱している「門」と「門」の関連性を追究する必要がある。先ず、『説文解字』「門」部の記載から検討を試みる。

『説文解字』「門」  聞也 从二戸象形 凡門之属皆从門 莫奔切

『説文眞本』十二篇上

「門」は、部首として記載され、二つの戸が向かい合う象形文字であり、音注は「莫奔切」である。「説文」には、五十六字が属し、「玉篇」には、百三十字を属する。部首「門」に属する文字は「説文」には九字、圧倒的多数を擁する「門」とでは使用頻度に大きな差が生じる。文字の姿を最も重要とする字書に、「門」の代替えともとれる「門」の記載が多い。この事実は、本来「門」と記すべき作業において、「門」と記載する可能性を内包している。

次に、残された文字資料から字形を確認していく。

### 甲骨文・金石文・木牘竹簡の「門」——文字資料より

#### 甲骨文

書体としての認識が十分ではなかった「甲骨文」には様々な字形が記される。「門」においても同様である。ここではさきの『字通』「門」の項に記された甲骨文をまず示す。

『字通』「門」



「門」 甲骨文「二二〇〇頁

この象形から「二人が髪をふり乱して格闘する形」を容易に想像することができる。

#### 『古文字詁林』

「門」と翻刻される二十九の文字が記され、許慎はじめ十一名の研究者による文字解説が記される。清末民初から満州国にかけて活動した考古学者で教育者の羅振玉は、辛亥革命後に来日し、日本書道界に書学の文化をもたらした一人である。「徒手」でつかみ合う象とし、多くの研究者と共にこの説を支持しているとしている。髪を逆立て二人がつかみ合う姿の象形である。

『古文字詁林』「門」

|   |       |         |      |         |         |       |        |       |         |       |   |        |   |    |
|---|-------|---------|------|---------|---------|-------|--------|-------|---------|-------|---|--------|---|----|
| 𠂔 | 甲一〇九二 | 地名      | 𠂔    | 甲一一五二   | 𠂔       | 甲一一五七 | 𠂔      | 甲三四六一 | 𠂔       | 鐵一八・四 | 𠂔 | 前二・九・三 | 𠂔 | 前  |
| 𠂔 | 二・九・四 | 乙四三三    | 𠂔    | 乙三九五六   | 𠂔       | 乙六九八八 | 𠂔      | 乙七一九  | 𠂔       | 粹一三三四 | 𠂔 | 存下二七四  | 𠂔 | 誠四 |
| 𠂔 | 五二    | 師友二・一四四 | 𠂔    | 坊簡三・一〇二 | 𠂔       | 燕四四二  | 【甲骨文編】 |       |         |       |   |        |   |    |
| 𠂔 | 甲1092 | 1152    | 1157 | 3461    | 乙433    | 6988  | 7119   | 佚460  | 京2・22・2 | 續存    |   |        |   |    |
| 𠂔 | 205   | 粹1324   | 𠂔    | 新3107   | 【續甲骨文編】 |       |        |       |         |       |   |        |   |    |

三・三六八頁

しかしながら当該文字「門」に関しては、「甲骨文編」にかくも多くの字形を掲載しながらも、「金文編」における記載はなく、本書次項「鬪」においては、篆書体から隸書体へ移行していく時期の木簡、「秦簡文字編」が初出となる。記載される「門構え」の十種の文字に関しては、「説文」の字形はあっても他の画像の掲載はない。『甲骨文字字釋総覧』の項目に当該字が記載される。八種の字形が模写され、「字釋」には「門」の他「鬪」が一文字記されている。「出典」には、十名の研究者の名が記され、『説文解字』の解釈の他、「地名」としているのが三項目ある<sup>(9)</sup>。

金石文

「甲骨文」に見える「門」の字形は、一万二千余器を所収した『殷周金文集成』に見ることはできない。しかし、紀元前十世紀頃、西周中期「恭王」の「九年衛鼎」に「鬪」と翻刻される文字がある。

「九年衛鼎」【鬪】



『殷周金文集成』2831

「門」構えに「鬪」の字形である。「鬪」の部分音が音であり、「門」が意味となり、六書の構成法でいう「形声」である。「鬪」が構えの中に書かれていない点に注目すべきである。竹内康浩氏「裘衛諸器銘文考釋—陝西省岐山縣董家村出土青銅器の研究(一)」において、釋文に

かな文字「つ・ツ」の起源

「鬪」と記し、読み下しては「鬪せり」とし、大意では「鬪（未詳）」としている。『説文解字』の注文には「經繆殺也、从門麥聲、錯曰、經繆、繆也」とある。また、『大漢和辞典』には、「絞也・殺也」などの記述があり、語釈として「くびりころす・しめころす」とある。土地譲渡に関する手続きを記した内容から、竹内氏は、紛争ではないと考え、「未詳」にしたと推察する。

「頌壺」 「門」



「(人) 門立中廷…」

『殷周金文集成9731』(台北 國立故宮博物院藏)

紀元前九世紀頃、西周晩期の銅器で、重要な場で使用された酒壺に刻されたものである。周王が頌を冊封した儀式が記録されている。重要な銘文だけに、文字も秀麗である。「門」に関しては、先の『説文解字』に似た字形と変わらない。

### 木簡

末代までも子孫に伝える意思をもって記す金石に対し、木や竹という身近にある簡便な書写材料に記す時、日常通行体として速度を上げて書くことで、大きく字形が変化する。大陸各地から発掘された膨大な木簡は、中国全土に文字文化が浸透していることを物語っている。書体は篆書体から隸書体へ移行していく時期で、書体の変遷上、最も興味深い時代である。前後の文字も併せて示す。

睡虎地秦簡 「治獄程式」(紀元前二二七年頃の竹簡) 湖北省雲夢県睡虎地



「…女子丙斗甲與丙相…」

『簡牘名蹟選』 4

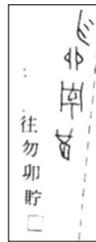
睡虎地秦簡の中でも、多くの書籍が出土した「喜」の墓からの出土品は、秦代の法律・政治・社会を知ることのできる同時資料として重視されている。当該木簡は訴訟に関する内容であり、藏鋒気味の起筆で一点一面を丁寧記している。書体は「秦隸」と言われる秦代の標準書体であるが、半世紀前の戦国期から出土している木簡類との共通点が指摘され、小篆から隸書へ転化したとする従来の書体変遷上の観点を見

直す重要な資料でもある。構えに対して旁が下にはみ出る字形であり、特徴的なやや右肩下がりの字姿である。本書に翻刻された文字は「鬪」ではなく「斗」である。同字としての認識に基づいた記載といえる。さらに精査してみると傍の「斲」、左部分の「𠄎」は甲骨文に頻繁に使用される「卯」の字形の下に「豆」が加えられた字形である。

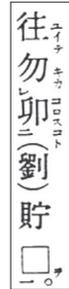
そこで、再び甲骨文まで遡り、当該部分の音義を確認する。『書道全集1』に掲載された「7甲骨文」は、一九二九年十一月、第三発掘の時小屯村の北から出土した骨片である。先ず拓本の一部と該部分の模写を示す。



|| 拓本



|| 模写



|| 白川静氏翻刻 (殷墟文字甲編二四九〇)

『書道全集1』「中國1 殷・周・秦」

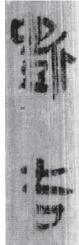
「干支」を表す「卯」に関して、白川氏は『字通』において「象形」文字であり、「牲肉を両分する形。卜辭に、祭祀に犠牲を割く意に用いており、劉殺の意」と、記述している。「卯」の下に(劉)を付記し、更に「コロスコト」と訓読を打つのは、卜辭に散見される「干支」とは異なる本来の意味を示すことにある。「劉」は、「卯・金・リ」から成り、「戦闘用のおの」「ころす」ことを意味している。

「鬪」という字形の複雑さが、「鬥」を省く字形を同字として認識することもあった。次の例がそれである。

周家台秦簡3



「鬪」



「…鬪 吉」

周家台秦簡4



「鬪」



「…鬪不合…」

『簡牘名蹟選』 4

「周家台秦簡」は、秦第二世皇帝元年（紀元前二〇九年頃）の簡牘で、湖北省荊州市閔沮周家台より出土した。書体は「秦隸」。秦代の「睡虎地秦簡」と一系の方折様式で、肥厚な点画により平正に構え、熟達した用筆である。能書家によって丁寧な運筆されている。先の例から「門」を省いた字形である。翻刻されている文字は「鬪」である。

張家山前漢簡 奏讞書3



「鬪」



「…（乃格）鬪 以劍擊」

『簡牘名蹟選』 5

呂后二年（紀元前一八六）頃の竹簡で、湖北省江陵張家山・前漢墓より出土した。訴訟の判例文書であるが、記述から、「鬪」は、武器をもって闘うことを意味する。白川静氏が甲骨文の字姿から、「鬥」は本来素手で戦うことを意味し、武器を持つことで、旁に様々な武器を示す字を組み込ませ、「鬪」の文字が成立していくと説いた字形成立の過程を見ることができる事例である。しかしながら、当該文字の構えは「門」、旁は「斲」、篆書特有の縦長の字形である。

額濟納居延前漢簡 相利全劍6



「鬪」



「慈新器劍文鬪」

『簡牘名蹟選』 6

前漢武帝期（紀元前一四一〜八七）〜王莽・新（九〜二三）頃の木簡である。「額濟納」と「居延」は、最北の守りを務めた同一地域の別称で、居延が古称である。本来、六枚からなる冊で、「刀劍の優劣を鑑別し、裝飾と文様について述べた著作」である。書体は横広となり、波磔に意を注ぎ、完成間近の隸書体を見ることが出来る。「鬪」と翻刻されているが、構えは「門」であり、旁の部分、右の「斤」は先の木簡と変わらないが、左は「豆」の上部に二点を縦に打つ字形であり、「斲」から省画化された姿となっている。この字形が、草体化の中で、「盟（タク）」音から、より字音に近い「豆」への移行を容易にしたと推察されるのである。

馬圈灣漢簡 簡牘9



「鬪」



「多問陳」



「鬪」



「未報鬪」

馬圈湾漢簡 簡牘11



「關」



「關書大和泉都」

『簡牘名蹟選』 7

「簡牘9」は、前漢宣帝・本始三年（紀元前七二）〜王莽新・地皇二年（二）頃、敦煌市西北九十五kmの馬圈湾の烽燧遺跡より出土した簡牘である。章草体の作例で、草隸（草体化した隸書体）と呼ばれる書体である。いずれも門構えの文字であるが、「問」の構えは、片仮名の「ツ」、「聞」は平仮名の「つ」に近似している。「聞」の最初の点画「丶」は門を草体化したときに打たれる点である。「簡牘11」は、下部が欠損しているため明確な判断はできないが、「關」の文末に「再拜言」とあることから「名謁（刺）」の類であろう。しかし、文字が草体化している点、書き出しが「十月晦…」と記されている点を考慮すると、記録簡の可能性もある。草体化した「門」構えは、我が国で使用される「つ・ツ」に限りなく近似している。

東牌楼後漢簡5



「聞」



「聞 念二因…」

『簡牘名蹟選』 2

後漢・靈帝期（一六八〜一八九）の簡牘で、長沙市内の古井戸から出土。杉材に記された簡牘である。前例より二百年近く後に書かれた。内容は書簡と思われるが、剥落が多く文意は十分に通じない。しかし、筆圧の変化も見られ、手慣れた草書で軽快に記され、書法の進歩が見て取れる。「聞」の門構えに上部の点は見られない。隣の「耳」が草書体でかな文字の「に」に多用される字形でもある。草書で書かれていることから、「門」も草書体である。ほぼ「つ」の字形である。

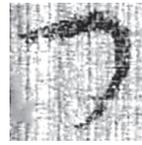
書信木簡

湖南省出土古代文物展 三国・呉（二二二〜二八〇年）の頃のもので、長沙市五一路走馬楼22号井戸より出土

「古代中国の文字と至宝」展<sup>(10)</sup>では門外不出の帛書も出陳された。「馬王堆帛書」である。一九九六年、世紀の大発見となった長沙市の走馬楼からは十四万点もの簡牘類が出土した。この簡は杉材の表裏両面に草書で墨書されており、私的な書簡に記される文字の多くは真書体ではなく、草体化の進んだ当時の日常通行体といえる。右側裏面は剥落していてほとんど読み取ることができない。その為記されている内容を理解

することはできないが、左側二行目下部に記された文字は「つ」に近似の字形で、「門」と翻刻されている。まさに仮名文字「つ」の字姿である。

書信木簡



「門」



「古代中国の文字と至宝」展出陳

まとめ

甲骨文にある「門」の字義に関しては、『説文解字』の注に見ることができ、管見では、金石文や筆写文字の中に「門」を見つけ出すことはできなかった。しかし、門を構えとしてみる時、書写材料が大きく変わる木簡等に記された門構えの字と、それ以前の字形との変化に注目すべきである。筆写に見るものほとんどすべてが門構えで記される。「たたかい」とは武器を手にすることを意味した。「門」は、その音義を加えた「鬪」という字形が成立したことで、「門」単独で使用されることは激減したと考える。

「門」も甲骨文から見ることができ、字形に大きな変化はない。使用頻度の高い「門」を含む門構えの字種には、むしろ筆写される草卒の書に大きな字形の変化が見てとれる。その字形は、日本のかな文字「ツ・つ」に極似する。

近似した字形「門」と「門」はその識別を困難にしたものと考えられる。構えの中に音義を示す旁を記すことで、識別可能となり、さらに「鬪」の構えは、限りなく「門」の字形に近似していったものと推測する。それは、書写材料が大きく変わる時期と重なっている。「鬪」の音を示す「盟」は古の酒を入れる礼器<sup>(1)</sup>、<sup>(1)</sup>の右部分「斤」は武器を表す。音義ともに合い通じるものがある。しかし、「盟」を、速度を上げて筆写していくと、「卯」と「豆」を合わせたような字姿となり、やがてさらに省画化されて、「豆」に近似の姿となる。「豆」は古く、食肉を

もった器である。また、「斤」は「リ」と互換可能な字義を持つ。更に「寸」が登場する。手書きにより、字形は様々な姿を呈し正確な字形を求めて作成された字書に記された「正字」の多くは「門」ではなく「門」で示し、当初独立した部首「門」は「門」部に組み込まれている。「斤」・「寸」・「斗」は、ともに本来度量衡に用いられた文字で、「豆」同様日々の生活において身近な文字である。これら単位を表す文字が、草体化の中で「斤・斗・寸」が互換性のある文字として使用され、「斲」の字形も同様に、「斲」や「對」に変化したと考える。

### 3 日本における「門」・「門」

#### 字書の「門」・「門」

##### 『篆隸万象名義』（九世紀前半）

『篆隸万象名義』は弘法大師空海撰と伝えられ、わが国最古の漢字字書である。三〇巻六帖からなる。先の大蔵資料にあった顧野王の『玉篇』を節略してはいるがほぼ踏襲し、本国ではすでに散逸してしまった原本玉篇の全体像がある程度知ることができる貴重な資料である。掲出字を五四二の部首に分類している。

##### 『篆隸万象名義』

「門」 見出し 一―三―三

門 當 復 反

□ 當 候 反 本文二―五〇―ウ5

門 部 門 當 復 反

「門」 見出し 一―五―三

門 莫 昆 反

□ 莫 昆 反 本文三―六六―オ4

門 莫 昆 反 守

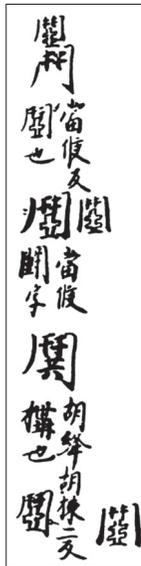
「門」の標出文字は、「門」というより戸を左右に向かい合わせた字形で、「門」に近似する。本文において、音注「當候反」、義注「闕」から「門」であると断定できるが、見出し、及び本文の字形は、いずれもほぼ「門」である。「門」の音注は「莫昆反」で、異なる部首である。少なくとも『篆隸万象名義』には、「門」と「門」の字音は異なるが、字形の差を明確に記してはいない。大陸での資料『大広益会玉篇』での注文では部首、及び正字の「闕」は「門」構えであった。この点について、季旭昇氏が、『説文新證』の「門」において、次のように記述している。

象門之形而非門，若从門者，非。…中略…原本《玉篇》的《篆隸萬象名義》中，「門」字及部内从「門」的九個字，「門」都寫成「門」形，與陸德明《孝經音義》所述合。

唐の陸德明『孝經音義』の説と照合している。氏は、先の『説文解字』の「門」の部の陳述に、許慎ならば、「争う也」などの義注を先ず示すはずであろうと指摘している。『篆隸万象名義』に記されたこの二文字の字形はほぼ同じである。「門」の本文にはあえて「門部」と記し、注文は「門」、字形は「門」である。くい違いはあるが、字音語としての「門」の存在は認識していた。

『新撰字鏡—天治本』（九世紀末）

平安時代の昌泰年間（八九八年～九〇一年）僧侶・昌住が編纂したとされる『新撰字鏡』は和訓を含む漢字字書である。八九二年（寛平四年）に三巻本が完成したとされるが、原本や写本は伝わっていない。天治元年（一一二四年）原本に近い写本が発見され、『新撰字鏡—天治本』と呼称されている。



「門部第三百三十七 十二字」卷十一

『新撰字鏡—天治本』「門」

「門部第四十五 百二十字」卷四



「門」の部の割注には「當候反」の音注があり、二番目の文字の義注には「闕」が記される。いくつか書き足された字形は他に類を見ないものもある。「門」部の標出字に、『篆隸万象名義』「門」の見出し字で記された字形も含まれている。草体化した字形を含めた次の文字群は、高い門を意味する「黨」であり、音注・義注も異なる。また、「闕」の字が最後に記され、「丁豆反去」と音注のみが記されるが「闕」の音で



ないが、廣目天像の山口大口費は孝徳紀白雉元年の條に、詔によって千仏像をきざんだ「藻山口直大口」にあてられることから、白雉元年（六五〇）の作と考えられる。人名と考えるべき部分に「閉」「刊」という文字がある<sup>(12)</sup>。解説者の榎本杜人氏は、「麻呂」にあてることが可能で、「木閉」を「紀麻呂」と解すべきであろうと推察している。また「刊」は、「閉」の門の省画とみられると述べている<sup>(13)</sup>。

法隆寺二天造像銘



廣目天「山口大口費上而次 木閉二人作也」



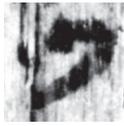
多聞天「薬師徳保上而 鐵師刊古二人作也」

『書道全集第9巻』11 平凡社

ともに門構えの文字であるが、草書体ではなく真書体で刻される「造像銘」に於いて、省画化された文字を使用することに注目すべきである。それは、漢字受容・仮名文字成立の過程に関して、半島における文字文化の影響が充分に考えられるからである<sup>(14)</sup>。

木簡

石神遺跡（六六五年）



「ツ」



（表）乙丑年十二月三野国ム下評

（裏）大山五十戸造 ム（牟）下マ部 知ツ（門）  
□（从）人田マ（部） 児安（田部児安）  
（従力）

『木簡研究第二六号』（二〇〇二—二〇〇三年発掘）

石神遺跡から出土した当木簡は古代の地方行政区分を示している。「乙丑年」は、六六五年と推定される。それは、「國評戸」と行政区分を示しているからである。七〇一年の大宝律令以降は「國郡里」となることから、それ以前六六五年と考えられる。

『木簡研究第二六号』に記載された翻刻は、ここに示した通りであるが、あえて（ ）内に考察した文字を示した。特に片仮名で記された「ム」は「牟」であろうし、「マ」は「部」、そして、「ツ」は草体化した「門」と推定する。<sup>(15)</sup>

藤原宮跡評制の木簡四二 庚子（文武）四年（七〇〇）



「木ツ里」



庚子年四月  
若狭國小丹生評  
木ツ里秦仁申二斗

若狭国の荷札「小丹生評木ツ里」は後の「若狭国遠敷郡木津郷」にあたる。「ツ」は略体（省画）仮名使用の早い例と解説されている。税目・品目は記載されていないが、二斗とあるので塩と推察されている。冒頭の「庚子年」は、西暦七〇〇年で大宝律令が定められる前年である。「木ツ里」と翻刻された「ツ」は、後の片仮名の「ツ」とほぼ同形である。

紫香楽宮跡出土木簡「歌木簡」甲賀市・史跡（七四五年以前）

デジタル赤外線写真（奈良文化財研究所提供）



「奈尔波ツ尔」（なにはつに）



なにはつ面（右）  
あさかやま面（左）

『古今和歌集』仮名序に見える「あさかやま—なにはつ」の歌のセットが、百五十年余りさかのぼって紫香楽宮の時代にすでに存在していた。この発見は、国語史上において特筆すべきことである。「歌木簡」とともに天平十六年（七四四）の隱岐国の調、鯁（アワビ）の荷札が出土していることを鑑みて、当木簡は天平十六年末〜十七年（七四五）初め以前に書かれたと推測されている。文字の配列などから木簡の全長は、全体で二尺（約六〇・六cm）程度であったことが推定される。このことから重要な儀式等に使用されたと考えられている。ここに記された「奈尔波ツ尔」の「つ」は現在使われている片仮名の「ツ」の字形とほぼ同形である。

紙面墨書

正倉院万葉仮名文書（七六一）



「わがやしないの…ツ（門）可佐（つかさ）」

二通ある「正倉院仮名文書」は奇跡的に残された紙面墨書で、上代の貴重な仮名文字資料である。「わがやしないの…」で始まる文書には「司」を「ツ可佐」と、一字一音の万葉仮名で記している。因みに前半にある「司」は「都可佐」と記している。仮名文書の書きぶりから当時の通行体と考えられ、日常的に使用していた字形として捉えることができる。片仮名の「ツ」のような字姿である。

まとめ

わが国の字書において、「門」「門」の関係は、先ずは別字として認識され、記載された。『玉篇』を踏襲する『篆隸万象妙義』の記載が基本である。「門」の音は「當候反」（トー）、「門」の音は「莫昆反」（モン）である。「門」の見出しの文字は、一部欠けた「門」のようであるが、本文に記された字形は「門」である。音の異なる二文字がともに同形の「門」であることは、以後の字書作りに混乱をもたらす。

『新撰字鏡—天治本』の「門」は、旁に「盟」「亞」に近似の字形が入る。管見では、大陸の字書に見ることのない字形である。さらに、「門」部では、『篆隸万象妙義』における「門」の見出しの字形も「同作」として併載される。この時点では異なる部首としての認識ではある。『字鏡 世尊寺本』では、「門」を含めて十種の字形が並ぶ。しかし、「門」を独立した部首とは認識しておらず、「門」部の最後に追加したような体裁で掲載される。また、「鬪」はなく、「鬪」として「門」部に記載されていることから、「たたかう」義を持つ文字は、「門」・「鬪」ではなく、「鬪」ということになる。

六書でいう「仮借」の用法で和語の音韻に近い字音語が選ばれ、その漢字を草体化していく過程で、より簡略化されて仮名は成立してきた。従って選ばれた字音語には、より簡略化された草書体の中から選ばれることも多々あった<sup>16)</sup>。

上代における木簡や紙面墨書には「ツ」とも「つ」とも読める字形が散見される。片仮名は文字通り、漢字訓読の為に漢字の一部をより簡略化して成立し、訓点資料の中で字形が整っていったのだが、当該字においては、片仮名の「ツ」がむしろ「門（門）」の草書体の字形であ

り、平仮名の「つ」は更に簡略化された字形と言える。

私自身最も違和感を覚えることは、多くの歴史資料で当該字が平仮名・片仮名であるかのように翻刻されていることである。仮名文字成立の歴史を考える時、やはり字源となる文字を記すべきである。

#### 4 「門」の音韻

我が国への文字の伝来時期はいまだ明確ではないが、大陸で完成した漢字を、かな文字として使用するには「六書」における「仮借」の用法で運用されたことに疑問はないであろう。四種の構成法とは異なり、字義を捨て、字形と字音によりかな文字は成立していく。かな文字は、漢文体の中で固有名詞に使用され、やがて、字音語を利用して和語の表記へと進化していった。中国音韻のより古い時代の字音を知ることと、和語にあてがわれていく字音語との整合性を確認することができる。上代において選択された字音語は九〇〇種を超えている。しかし、大陸における字形・字義・字音は必ずしも一定ではなかった。特に字音に関しては、日本での研究においても、呉音・漢音・唐宋音に分け、更に呉音以前の古音に分けられている<sup>(17)</sup>。大陸での字音研究では、古音・今音に分けていたが、近代では、古音を更に分けて上古音・中古音と呼称して区別する<sup>(18)</sup>。大陸における上古音は、「詩経」を基にした周秦漢時代の音韻である<sup>(19)</sup>。また、中古音は、「切韻」(実質的には「広韻」)を基に展開している。「つ・ツ」の字形は、文字資料草創期から散見される。特に上古音を調べることで、必ずや仮名文字成立の草創期における字音語の手がかりとなる事象を見つけ出すことができるはずである。

#### 韻書

まず、大野透氏の著作『萬葉仮名の研究』において「つ」の仮名字母として記された文字の内、本研究と関連すると思われるいくつかを、中古音の基礎となる『広韻』で検索し、その結果を次に示す。仮名字母研究の草創期から度々指摘されてきた「川」等も併載する。

「鬥」 1例 去声 50…候 都豆切 50丁裏07行目  
 「闘」 1例 去声 50…候 都豆切 50丁裏08行目  
 「豆」 1例 去声 50…候 田侯切 50丁裏04行目  
 「都」 1例 上平 11…模 當孤切 39丁裏03行目  
 「頭」 1例 下平 19…侯 度侯切 42丁裏05行目  
 「斗」 1例 上声 45…厚 當口切 47丁裏10行目  
 「鬥」「闘」は「豆」とともに、「去声・五〇候」に記される。

「川」 1例 下平 2…仙 昌縁切 05丁裏08行目  
 「州」 1例 下平 18…尤 職流切 38丁裏06行目  
 「津」 1例 上平 17…眞 將鄰切 48丁裏04行目

「豆」は、「都」「津」とともに、濁音を含めて類出する万葉仮名である。<sup>(20)</sup> 大野透氏の調査において、万葉仮名に「鬥」はない。しかし、『日本書紀』に「闘」を「つ」と読む例を数例認めることができる。<sup>(21)</sup> 音韻を視点に仮名字母を考えたとき、「鬥」が「つ」の万葉仮名として使用されることの不思議さはないであろう。それは、「鬥(闘)」は「豆」と同様、唐音では「トウ」であるが、呉音ならば従来「ツ」と認識されている。精査されるべき事案である。

### 『漢文典』

「上海辭書出版社」より出版された『漢文典』の原著は、中国語の音韻学、特に上古音や中古音の研究で著名なカール・グレン（中国名 高本漢）によるものである。標出文字の右横に、上古音／中古音／今音が順に示され、甲骨文の字形も手書きされている。中国漢字音の音韻体系で言う古音を更に分けて、周代及び漢代の頃の上古中国語を指す「上古音」、そして南北朝時代後期から、隋・唐・五代・宋初にかけて使用された中古中国語の音韻体系を示す「中古音」の調査は、かな文字として使用される字音語の音韻を知る上で必須の調査と言える。

従来「つ・ツ」の字母として考えられてきた「川・州・津」の上古音を調べ、更に提唱する「鬥」の検索を試みた。甲骨文は「呉瑞松」氏の手書きを模写したものである故、画像で示すこととした。

図版(4)には、「鬪」の初文として「鬥」が記され、続く次項 図版(5)では、隣の「鬪」が加えられる。「鬥」と「鬪」

(4)

**1234**

 tǔg/təu-/dǒu  
争鬪。見《説文》。此字是1235組“鬪”的初文。  
(無書證)  
2572殷甲文(A2:9, 4, 人  
名) 此字象形。  2572

(5)

**1235**

 tǔk/tək/zhuó  
酒器。見《説文》。(無書證)  
此字初文一定是象形字。  
 tǔk/tək/zhuó  
①砍，伐，削。《詩·股武》：“方～是度。”②劈開。《左·宣十》：“～子家之棺。”  
 tǔg/təu-/dǒu  
争吵，争鬪。《論語·季氏》：“戒之在～。”

下列各字因缺少《詩經》押韵或諧聲材料而無法構擬出它們的上古讀音，它們中間大部分字的字形解釋不詳，我是根據中古漢語音系(《切韻》)來安排這些字的。

図版(1)「川」・(2)「州」・(3)「津」に記された音韻は、各字音韻が、かな文字「つ」を表記するには相応しくないことが歴然としている。いずれも古くから日本で使用され続けてきた文字ではあるが、「仮借」の用法で当てられる「つ・ツ」にはどの時代においても該当しない。

(1)

**462**

 t'ɿwan/tɕ'ɿwen/chuān  
溪，河。《詩·雲漢》：“早既太甚，滌滌山～。”  
此字中古音不規則，《詩經》韵表明，此字最初屬於ən韵部。此字象形，參940組“災”。

(2)

**1086**

 tɿoŋ/tɕiəu/zhōu  
①水中小島。《説文》引《詩》：“在河之～。”(按：今《詩·關雎》作“洲”)②古區域名。《書·禹貢》：“九～攸同。”③周代編制。《周禮·大司徒》：“五黨為～。”④聚集。《國語·齊語》：“令夫士羣萃而～處。”  
2294殷甲文(O262)   
2295周I(銘文63) 此字象形。 2294—2295

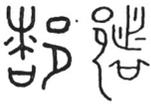
(3)

 tɕiən/tɕiən/jīn  
①可徒涉之處，渡口。《書·微子》：“今殷其淪喪，若涉大水，其無～涯。”②潤濕。《周禮·大司徒》：“其民黑而～。”此字聲符有所減省。

は同字として扱われている。先の本稿「大陸資料 周花台秦簡」の資料で見た「𠂔」が「𠂔」と翻刻される由縁であり、その初文は「鬥」である。音韻部分、特に上古音を見るとかな文字「つ・ツ」に充てるに相応しいことが理解される。

反切の起源は後漢頃との説が有力ではあるが、「声母」と「韻母」によって音韻の再現を可能にした方法は、不完全ではあるが、音韻を知る上で画期的な方法である。『広韻』に示された「鬥」の反切は、「都豆切」である。声母「都」と韻母「豆」を提示する。図版(6)・(7)参照

(6)

**都** to/tuo/dū  
都市。《詩・都人士》：“彼～人士，狐裘黃黃。”  
同音假借 ①閑雅。《詩・有女同車》：“彼美孟姜，洵美且～。”②嘆詞。《書・堯典》：“驩兜曰：‘～！’”  
通“澹”。《管子・水地》：“而水以為～居。”G1727, 1357  
92周Ⅲ（銘文184） 93周Ⅲ／Ⅳ（銘文301）  
  
92-93

(7)

**118**  
**豆** d'ü-/d'äu:/dòu  
禮器名。《詩・民生》：“印盛于～。”  
同音假借 豆子。《禮・投壺》：“壺中實小～焉，為其矢之躍而出也。”  
通“斗”。《周禮・梓人》：“食一～肉，飲一～酒，中人之食也。”  
328周Ⅱ（銘文138，人名） 329周Ⅱ（銘文147，人名） 此字象形。  
  
328-329

(8)

**116**  
**斗** tu/təu:/dǒu  
①量器名。《禮・月令》：“鈞衡石，角～甬，正權概。”②杓。《詩・行葦》：“酌以大～，以祈黃耇。”③星座名。  
《詩・大東》：“維北有～，不可以挹酒漿。”  
t̚i̯u/t̚e̯i̯u:/zhǔ  
杓。《周禮・鬯人》：“大喪之大泅設～。”

上古音では、声母の「都」は「t̚」<sup>1</sup>、韻母の「豆」は「u̯」<sup>2</sup>、合せて「t̚u̯」<sup>3</sup>となる。現在、日本語「つ・ツ」の発音は、「tsu̯」音であるが、少なくとも上代から室町時代頃は「t̚u̯」音であった。

図版(8)参照

「𠂔」の俗字とされる「𠂔」の旁は「斗」である。「斗」の字音語が「鬥」の旁に使用されたが、「義」に「たたかう」意味はない。「斗」は本来、度量衡の単位として伝来し、わが国でも古くから使用されてきた。しかし、後に「𠂔」の旁であった「斗」のみで、「たたかう」意味

を持つようになる。「斗・寸」は起源において度量衡の単位であり、時として互換性をもって使用される。

二〇〇四年 サントリー美術館で開催された『古代中国の文字と至宝』湖南省出土古代文物展に陳列された木簡の多くは帳簿・公文書・書簡の類であった。長沙から出土した呉（二二二～二八〇）の時代の木簡には、「…米合一百六十一斛一鬥」と釈文にはあるが、字形は明らかに「斗」である。同じく呉の木簡に「塩四百廿六狼一鬥九升八合四勺」「米一百一十二狼六鬥八升」と翻刻されている。誤植かと思えたが、むしろ、本来の文字を記したものと推察する。

## 仮名の音韻

沼本克明氏は『日本漢字音の歴史的研究』において、呉音に関する詳細な検討をしている。「候韻字の呉音の假名書音形の實態」で、呉音の体系がいまだ不明であることを踏まえ、「出来るだけ古い資料の假名書音形を拾い集めて」さらに「呉音資料に認められる用例」を一括して整理している。関係する文字を選択し、抄録する。

- ㊦形のもの∥…頭・豆<sup>ツ</sup>
- ㊧形のもの∥…斗<sup>ト</sup>
- ㊨形のもの∥…鬪<sup>ト</sup>
- ◎ ㊩形と㊪形のもの∥…逗<sup>ツ</sup>

二音形の「逗」に関しては、「ツ（又はヅ）」と記される資料を紹介し「トウ」と併記され、声点の違いを述べた上、加点者が「トウ去声」漢音「ツウ（又はヅウ）平声」呉音の認識で加点したものではないか、と推測している。

## まとめ

現在日本語の「つ・ッ」は破擦音で、「tsu」と発音される。しかしながら、少なくとも上代においては「tɕ」音であった。室町中期までは「tɕ」であったが、室町末期には「su」と音韻の変化が起き、これによりやがて江戸時代には「じ・ぢ・ず・づ」の所謂「四つ仮名」の混同がおきたと、築島裕氏がその著書『国語学』で述べられている。江戸時代に刊行された『蜷縮涼鼓集』では専ら「じ・ぢ・ず・づ」の仮名遣

いを示している。「四つ仮名」問題の起因は、音韻の変化によるものである。上代において〔E〕であった音が、破擦音〔GE〕に変化するこ  
とで起きた混乱である。<sup>(22)</sup> 上代仮名文字成立時において、「つ・ツ」は〔E〕音であった。

「つ・ツ」の字母として伝承されてきた「川・州・津」は音韻上、仮名文字「つ・ツ」の成立に関与していない。字形が最も近い「川」は  
音韻上、「州」は字形そのものに、そして「津」は訓仮名であり、かな文字が成立する草創期に関与するには無理がある。

「門」は日本の上代における「つ・ツ」に限りなく近い音韻を持った字音語であり、万葉仮名成立に深く関与しているものと推察するのである。

## 5 おわりに

『大漢和辞典』の「門」部に記載されている文字は、三十字ある。音韻上共通する「門」・「鬮」、更に俗字・略字も含めて抽出し抄録する。

① **門** 45632

トウ  
ツ  
カク  
〔集韻〕丁候切  
カ又  
〔集韻〕克角切

② **鬮** 45657

トウ  
ツ  
ツトウ  
〔集韻〕丁候切  
カ又  
〔集韻〕當侯切

**看** 45642

〔鬮12-45657〕に同じ

**豆** 45643

〔鬮12-45657〕に同じ

**鬮** 45649

〔鬮12-45657〕の俗字

**鬮** 45650

〔鬮12-45657〕の俗字

**平** 45636

〔鬮12-45657〕の俗字

**鬮** 45649' 〔鬮12-45649〕の略字

「門」と「鬮」の口の音注は同じである。また「鬮」と同字、俗字、俗字の略字と多様である。現在「たたかう」という義をもつ字音語は  
「門」構えの略字体であり、音は「トウ」で定着している。しかし、大陸の上古音から類推するに、「門（鬮）」が我が国にける上代の音韻  
〔E〕に最も近い字音語であったと考えられる。この音は室町時代まで続き、現在の破擦音〔GE〕に変化する。

大陸で完成した漢字を、かな文字として使用するには「六書」における「仮借」の用法により運用されたことに疑問はないであろう。四種の構成法とは異なり、字義を捨て、字形と字音によりかな文字は成立し運用される。かな文字「つ・ツ」の起源を「字形・字音」の両面からの考察し、得られた結論は以下のとおりである。

大陸において、「門」構えの字でありながらその部首を「門」から「鬥」に替えられたのは、少なくとも漢代以前、戦国・秦時代から始まっていた。縦長の篆書体から横広の隸書体へと書体の変遷の中で字形変化は加速した。大陸の簡牘類の中に「つ・ツ」の字形が散見される。木簡等に手書きすることで草体化が進んだ。例えば平仮名の「へ」の字源は「部」である。漢代、木簡の中で横広の隸書へと書体が変わる。多用される「部」は、その部首「卩」のみ九〇度左へ回転して定着する。我が国へも草体化した字形で伝わり、仮名の「へ」として定着した。「つ・ツ」同様、平仮名も片仮名もほぼ同字形である。

「門」は「つ」の音になりえないが、漢代すでに「門」と同字形であった「鬥」は上古音においては「*ɬ*」と発音されていた。また、日本語の「つ・ツ」は、現代の破擦音「*ʃ*」とは異なり、室町時代頃までは「*ɬ*」音であった。仮借の用法で成立していくかな文字は、同時代の字音語にその字源を求めた。草体化すると「門」と同一字形となる「鬥」は、上代における「つ・ツ」も「*ɬ*」音にもっとも近い発音の字音語として、使用されたと推測する。

万葉仮名には、呉音によって表記された文字が少なくない。「都（つ）、尔・耳・児（に）、遠・越（を）」何れも呉音による。呉の木簡の中には、度量衡の単位として、「斛・門・升・合・勺」と記す場合がある。「鬪」を「斗」と記すように、呉国では「門」と「斗」（上古音では「*ɬ*」）は互換性のある文字であった。日本では七〇二年、大宝律令制における度量衡の「量」は、「狼・斗・升・合・夕・撰」と制定されるが、それ以前呉の木簡に見られる単位が七世紀頃までの日本の資料に見出すことができたなら、更に考察は深まるはずである。

数字「二・三・八・九・千・万」などがかな文字としても使用されたように、重要な単位として最も身近な文字「寸・斗（門）」がかな文字「寸↓す」同様、「門↓つ」として使用された可能性は高い。仮名文字「つ」の字源は、古来異説が多く、未だに定説がない理由の一つは、日本に伝えられた時、すでに完全な「つ・ツ」の字形であったため、字源を辿る手立てがなかったものと推察する。

以上のことから、「つ・ツ」の起源となる文字は、「門」が最も有力と考える。

最後に『大書源』（二玄社）に掲載されている「門」部の名跡を示す。

草書体の「門」構えは、「門」構え同様、平仮名・片仮名の字形「ツ・つ」と同形で記されてきたことが理解できる。

|                                                                                                    |                                                                                                      |                                                                                                    |                                                                                             |                                                                                                    |                                                                                             |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| <br>明 宋克          | <br>北宋 米芾<br>呉江舟中詩卷 | <br>北魏 元暹墓誌       | <br>清 呉昌碩  | <br>唐 顏真卿<br>千祿字書 | <br>清 丁敬   |
| <br>明 文徵明         | <br>元 馮子振           | <br>唐 昭仁寺碑        | <br>明 王鏊   | <br>明 沈周          | <br>清 何紹基  |
| <br>明 齊山          | <br>明 沈周            | <br>唐 顏真卿<br>千祿字書 | <br>草儀辨体   | <br>明 釋山          | <br>清 趙之謙  |
| <br>草儀辨体          | <br>明 徐渭            | <br>唐 九經字樣        | <br>説文篆文   | <br>清 何紹基         | <br>清 呉昌碩  |
| <br>前漢 張芝<br>山竹篇  | <br>明 黃道周           | <br>唐 九經字樣        | <br>説文篆文   | <br>北宋 蘇軾         | <br>殷 甲骨文  |
| <br>宋 蔡夢龍<br>虎地齋南 | <br>明 王鐸            | <br>奈良 中阿含經       | <br>清 王澐   | <br>清 呉昌碩         | <br>説文篆文   |
| <br>清 呉大澂         | <br>吳 魯象<br>魯 魯章    | <br>北宋 蘇軾         | <br>清 王澐   | <br>漢 武威漢簡        | <br>説文篆文   |
| <br>説文篆文          | <br>元 趙孟頫           | <br>北宋 蘇軾         | <br>清 王澐   | <br>清 呉昌碩         | <br>説文篆文   |
| <br>説文篆文         | <br>元 趙孟頫          | <br>北宋 蘇軾        | <br>清 王澐  | <br>清 呉昌碩        | <br>説文篆文  |
| <br>説文篆文        | <br>元 趙孟頫         | <br>北宋 蘇軾       | <br>清 王澐 | <br>清 呉昌碩       | <br>説文篆文 |
| <br>説文篆文        | <br>元 趙孟頫         | <br>北宋 蘇軾       | <br>清 王澐 | <br>清 呉昌碩       | <br>説文篆文 |
| <br>説文篆文        | <br>元 趙孟頫         | <br>北宋 蘇軾       | <br>清 王澐 | <br>清 呉昌碩       | <br>説文篆文 |

注

(1) 「書体・字体・字形」に関しては、石塚晴通（一九八四年『圖書寮本 日本書紀 研究篇（汲古書院）』において「書體―漢字の形に於て存在する社會共通の様式。多くはその其の漢字資料の目的により決る。楷書・草書等 字體―書體内に於て存在する一々の漢字の社會共通の基準 字形―字體内に於て認識する一々の漢字の書寫された形そのもの」とした定義を踏襲する。電子文字に使う「フォント」とは異なる。

(2) 「書体の変遷」氏」から「豆」へ」二〇〇二年十一月八日・第八十七回訓点語学会研究発表・於徳島大学『訓点語と訓点資料』110輯所収 訓点語

学会 二〇〇二

「書体の変遷Ⅱ―無・无―」二〇〇四年十月十一日・第十四回書学書道史学会研究発表・於札幌藤女子大学・『書学書道史研究』巻14所収 書学書道史学会 二〇〇四

「書体の変遷Ⅲ―爾・尔・尔―」二〇〇六年七月九日・第五回書法文化書法教育国際会議にて発表・於広島安田女子大学 『訓点語と訓点資料』18輯所収 訓点語学会 二〇〇七

(3) 「書体の変遷Ⅳ―門・門・つ―」二〇〇六年十一月十日、第九十五回訓点語学会研究発表会 於岡山大学

(4) 『同文通考』巻二では、『日本書紀』（卜部家）の説として、肥人の書をもって「我國ノ假名ノ始」とし、「ツ」の項目では、白蛾の説として「川」に「ツ」の音がないことから「津」の義に通じると追記している。

(5) 二十九面を割いて伝来してきた諸説を考察している。その中に「門」もあるが、結論は「保留」となった。

(6) 小松英雄『日本語書記史原論』総説 日本語書記史と日本語史究 5 仮名文 笠間書院 一九九八

(7) 『説文解字』の画像は以後すべて北海道大学所蔵『説文眞本』汲古閣蔵版北宋本校刊を使用する。

(8) 『異体字研究資料集成』1 期別巻2 杉本つとむ編 雄山閣出版 一九七五

(9) 『甲骨文字字釋総覧』第三篇・文類(334)・綜類 (001—097) に掲載

(10) サントリー美術館に於いて、二〇〇四年九月七日〜十月二十四日迄、湖南省出土古代文物展「古代中国の文字と至宝」展が開催された。残念ながら、図版の中に当該字は見つけられなかったが、丁寧な運筆された秦隸の字姿を見ることができた。

(11) 「罍」に関して『説文解字注』に義は「器也」・音は「竹角切」とある。大漢和辞典に音は「トウ・ヅ〔集韻〕徒口切」・義は「〔一〕古の酒を入れる禮器：〔二〕斗に同じ。」と記されている。

(12) 「卂」は、「𠂔」と同字。象形で「手に物を持つさま」を表す。「𠂔」の右部分とも同字。この文字は、『大漢和辞典』において「𠂔」部に記載される。〈45633〉

(13) 『書道全集第9巻』11 (平凡社・一九六五) 榎本杜人氏の解説によると「𠂔」は「和名抄・字鏡集・字鏡に「萬良」と読まれているから、麻羅・眞浦とともに「麻呂」にあてるとすれば、「木閉」を「紀麻呂」と解すべきであろうか…と記している。

(14) 紅林幸子『訓点語と訓点資料』第一〇輯「書体の変遷―「氏」から「𠂔」へ―」訓点語学会編 二〇〇三年に於いて、木簡に於いて篆書体から草体化した「氏」が、半島に伝わり、真書体で「𠂔」という字形で書かれた。『広開土王碑』には城の名に「𠂔」が使用されている。この字が我が国にもたらされ、長くより草体化した字形「𠂔」で、仮名の「て」として使用され続けてきた。今も、仮名書道の作品の中で多用されている。

(15) 論述の中で「ム」と「マ」に関しては触れているが「ツ」に関しては全く触れていない。

(16) 「正倉院仮名文書」においても、「太―た」「止―と」はほぼ平仮名と同形である、また、「爾―尔」においては、紅林幸子『訓点語と訓点資料』第一一八輯「書体の変遷―「爾」・尔・尔―」で論述したように、「篆書体の「爾」の上部が省画化し「尔」となり、草体化により「尔」の字形がうまれ、日本においては多用する「に」の仮名として使用頻度が高い。さらに草体化した「**𠂔**」の字形で多用される。

(17) 河野六郎氏の「日本呉音」に就いて―において、「呉音」の基となった中国原音が時代・地域とも単一でなく、いくつかの波によって日本に齎された」とし、朝鮮字音同様「呉音」の複層性を指摘している。その一因として、音節構造の異なる漢字音が日本語の中に移植される過程で、様々な変

容が生じて来るのも自然である、と指摘している。

(18) 字音を今音(現代音)と古音(古代音)に分け、更に古音を上古・中古・近古に分ける。研究者により分け方はいささか異なるが、後に示す『漢文典』(修訂版)「上海辭書出版社出版」高本漢(Bernhard Karlgren)原著 潘悟雲「等」編譯一九九七年においても、上古音・中古音・今音に分けて、記載される。時代と共に変化する中国音韻の中でも、特に上古音に関しては明代から研究は進められ、二十世紀になりスエーデンのカールグレンによって近代的な中国語の音韻研究が始まった。「詩経」を基に研究が進められているが、いまだ研究途上と言われている。

(19) 唐作藩著『中国音韻学研究の手引き』池田武雄訳では、「上古音」というのは、先秦兩漢(西暦紀元二世紀以前)の語音をさしている、所謂(今音)というのとは主として隋唐の時代(西暦紀元六世紀から十世紀まで)の語音をさして言う。(今音)はもう(中古音)と呼ぶべきであり、(古音)は(上古音)と呼ぶべきであろう。

(20) 「万葉仮名」を時として「真仮名」と称することがある。「真仮名」は「草仮名」と比較した時の草体化の有無をさす。「万葉仮名」は、基本「六書」の機能によつて成り立つ仮名を指す。訓読することで「訓仮名」も加わり、「戯訓」も含めて広義に解釈すべきと考える。

(21) 『日本書紀』に「門」は使用されないが、「關」はある。「相關」を「アヒアラソフ」(巻1)「クヒアヒテ」(巻19)のような訓読もあるが、「關鶏」と書いて「ツゲ(巻11)」と読む例もある。

(22) 十六世紀末、キリシタン資料のタ行は、「fa/chi/ku/te/to」と記され、「ツ」は破擦音である。「四つ仮名」のザ行は「[i:zu]・タ行は「[gʷzɯ]」と表記されていることから、区別はされている。音の違いは理解できるが、実際の発音はかなり近寄り、江戸時代の日本人の耳には識別しにくい状況であった。

#### 参考文献・参考資料

- 唐作藩 『中国音韻学研究の手引き』池田武雄 訳 京都府立大学 中国文学研究室 一九六二
- 石塚晴通 『圖書寮本 日本書紀 研究篇』(汲古書院) 一九八四
- 大野透 『萬葉仮名の研究』明治書院 一九六二
- 大野透 『続萬葉仮名の研究』高山本店 一九七七
- 大島正二 『唐代の人は漢詩をどう詠んだか 中国音韻学への誘い』岩波書店 二〇〇九
- 大島正二 『漢字と中国人―文化史をよみとく―』岩波新書 二〇〇三
- 河野六郎 著『河野六郎著作集2』中国音韻学論文集 平凡社 一九七九
- 小松英雄 『日本語書記史原論』笠間書院 一九九八
- 白川静 『書道全集第1巻』「中國1 殷・周・秦」解説 平凡社 一九六五
- 白川静 『字通』『字訓』『字統』平凡社 一九九七
- 竹内康浩 『東洋文化研究所紀要』第百二十冊「裘衛諸器銘文考釋―陝西省岐山縣董家村出土青銅器の研究(一)」一九九三年三月
- 築島裕 『日本語の世界』中央公論社 一九八一

- 築島裕 『国語学』東京大学出版会 一九六四
- 沼本克明 『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院 一九九七
- 東野治之 『漢字講座』第四卷「古代の漢字と言葉」明治書院 一九八八
- 松村明 『国語史概説』秀英出版 一九七二
- 紅林幸子 『訓点語と訓点資料』第一一〇輯 「書体の変遷―「氏」から「豆」へ―」訓点語学会編 二〇〇三
- 紅林幸子 『訓点語と訓点資料』第一一八輯 「書体の変遷―「爾」・「尔」」訓点語学会編 二〇〇七
- 『大漢和辞典』諸橋轍次著 大修館書店 一九七四
- 『説文眞本』汲古閣蔵版北宋本校刊
- 『説文解字注』天工書局 一九九二
- 『説文新證』上冊 季旭昇 撰 中華民國九一年 藝文印書館 二〇〇二
- 『説文新證』下冊 季旭昇 撰 中華民國九三年 藝文印書館 二〇〇四
- 『干祿字書』(文化十四年本)官板出雲寺本 異体字研究資料集成 杉本つとむ編 雄山閣出版 一九七五
- 『龍龕手鏡』(高麗本)(中華書局出版) 一九八五
- 『龍龕手鑑』異体字研究資料集成 杉本つとむ編 雄山閣出版 一九七五
- 『韻鏡校本と廣韻索引』馬淵和夫著 巖南堂 一九七〇
- 『広韻』校正宋本 張氏重刊 芸文印書館行 中華民國九十一年 二〇〇一
- 『漢文典』(修訂版)「上海辭書出版社出版」高本漢 (Bernhard Karlgren) 原著 潘悟雲 [等] 編譯一九九七
- 『古文字詁林』卷三 上海教育出版社 二〇〇一年
- 『甲骨文字釋義』東京大学出版会 松丸道雄、高嶋謙一 編一九九四
- 『殷周金文集成』中国社会科学院考古研究所編 中華書局 一九八四、一九九〇
- 『殷周金文集成釋文』中国社会科学院考古研究所編 中華書局 二〇〇一
- 『殷周金文集成引得』張亜初編 中華書局 二〇〇一
- 『簡牘名蹟選1』湖南篇一〈秦〉(株)二玄社責任編集 西林昭一 二〇〇九
- 『簡牘名蹟選2』湖南篇二〈前漢・後漢・三国吳〉(株)二玄社責任編集 西林昭一 二〇〇九
- 『簡牘名蹟選4』湖北篇二〈秦・漢I〉(株)二玄社責任編集 西林昭一 二〇〇九
- 『簡牘名蹟選5』湖北篇三〈漢II〉(株)二玄社責任編集 西林昭一 二〇〇九
- 『簡牘名蹟選6』甘肅篇一〈秦・漢I・新〉(株)二玄社責任編集 西林昭一 二〇〇九
- 『簡牘名蹟選7』甘肅篇二〈漢II〉(株)二玄社責任編集 西林昭一 二〇〇九
- 『簡牘名蹟選8』甘肅篇三〈漢III〉(株)二玄社責任編集 西林昭一 二〇〇九

- 『居延新出土書法木簡撰』毎日新聞社 解説 西林昭一 一九九六  
 『篆隸万象名義』高山寺古辭書資料第一（高山寺資料叢書第六冊）代表者 築島裕 東京大學出版會 一九七七  
 『新撰字鏡』（天治本 宮内庁書陵部蔵）（臨川書店）一九六七  
 『字鏡（世尊寺本）』（古辭書音義集成）汲古書院 一九八六  
 『同文通考』新井白石著、新井白蛾補 宝曆十年（一七六〇）刊本 早大図書館蔵 『異体字研究資料集成第一巻』雄山閣 一九七三  
 『仮名考』岡田真澄著 文政五年（一八二二）刊本 国立国会図書館の複製 勉誠社 勉誠社文庫101 一九八一  
 『仮名本末』伴信友著 嘉永三年（一八五〇）刊本 勉誠社 勉誠社文庫 62・63 一九七九  
 『文字のしるべ』チェンバレン (Basil Hall Chamberlain) ケリー及ウラルシ商会 一九〇五  
 『書道全集第9巻』平凡社 一九六五  
 『書籍名品叢刊』一〇五 二玄社 一九六三  
 『書籍名品叢刊』一〇八 解説 伏見冲敬 二玄社 一九六三  
 『蜺縮涼鼓集』元禄八年（一六九五）刊  
 『異体字研究資料集成』別巻一 杉本つとむ 編 昭和五十年（一九七五年）  
 『角川書道字典』伏見冲敬編 角川書店 一九七七  
 『大書源』二玄社 二〇〇七  
 『日本書紀』黒板勝美 国史大系編修會編 吉川弘文館 一九六六  
 『日本書紀総索引』編 國學院大學日本文化研究所 中村啓信 角川書店 一九六六  
 『古代中国の文字と至宝』湖南省出土古代文物展 サントリー美術館 二〇〇四  
 『地下の正倉院展』年号と木簡』第三期展示木簡』平城宮跡資料館秋期特別展 二〇一九  
 文化遺産オンライン <https://bunkani.ac.jp/heritages/search/title>

付記 本稿は、二〇〇六年十一月十日、岡山大学にて開催された「第九十五回訓点語学会研究発表会」での研究発表「書体の変遷Ⅳ―門・門・つー」をもとに執筆したものです。

謝辞 学会発表にあたり、ご指導くださいました北海道大学名誉教授・石塚晴通先生にあらためてこの場をお借りして、感謝申し上げます。  
 またこの度、音韻に関する多くの資料を提供し、ご教示くださいました國學院大學北海道短期大学部教授・山寺三知先生に大変お世話になりました。紙面をお借りして深謝申し上げます。

（くればやし ゆきこ） 國學院大學北海道短期大学部兼任講師 博士（文学）